

研究代表者 所属・職：健康科学部・准教授

氏 名：坂口 大史

研究課題名：ものづくりとリハビリ活動を通じた複数地域連動によるまちづくりに関する実践的研究

研究の概要

2020 年より続いた新型コロナウイルスの感染拡大により、地域における活動は制限され、地域の賑わいが失われつつある。特に、本研究で対象とする半田市亀崎地区、有脇地区、乙川地区でも、少子高齢化や町の衰退の進行などが顕著であり、古くから続く伝統行事も中止されるなど、日常的な住民同士の交流も行えない状況が続いていた。コロナ禍は住民同士の関わりを希薄化させるのと同時に、地域活性化の面で大きな負の影響を及ぼしている。コロナ禍が一定の落ち着きを見せた一方で、コロナ禍で分断された地域コミュニティの結束を取り戻す必要がある。

研究代表者はこれまで、半田市亀崎地区や有脇地区を対象として、住民、NPO、行政や各施設の職員と連携してまちづくり活動に取り組んできた。特に、地域の空き家を活用した学生シェアハウスや亀崎地区の児童センター、図書館、コミュニティサロン、高齢者施設等における活動は、テレビや新聞等のメディアでも取り上げられるなど、地域と大学の連携によるまちづくりのロールモデルの一つとして一定の成果を得てきた。また、大学周辺にある有脇地区でも、地域特有の課題を把握し、亀崎地区と同様に有脇地区における地域連携まちづくり活動を推進してきた。これにより、半田キャンパスと周辺地域の連携強化のみならず、大学の地域貢献にも寄与することで、学生にとってのキャンパス外における学びの場を広げてきた。本研究では、過去に取り組んできた亀崎地区や有脇地区に加えて、乙川地区も加えて活動を展開する。具体的には、ものづくりによる交流に加えて、地域によるニーズが顕著である「リハビリ」に関する活動も展開することで、対象地域における多世代交流の活動へ展開し、コミュニティの結束を強化しつつ、地域活性化に関する効果を実証することを目的とする。

達成状況・成果内容

これまで亀崎地区および有脇地区において実施してきたものづくりに関するワークショップやイベントについて、主に単発開催が中心であり、地域に日常的な活動として十分に定着していないという課題が確認された。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、地域のコミュニティ活動が分断され、継続的な交流や協働が困難となったことも大きな要因と考えられる。

これらの課題を踏まえ、本研究では新たに乙川地区を対象地域に加え、ものづくり活動およびリハビリテーション活動を核とした地域連携型のまちづくりを推進することとした。特に、子どもから高齢者まで幅広い世代を対象とした多世代交流を主軸とし、地域に根ざした持続可能なまちづくりの在り方を、具体的なデータをもとに検証した。活動においては、地域のニーズが高い「ものづくり」を中心に据え、多世代が日常的に交流できる仕組みの構築を目指した。また、亀崎・有脇・乙川の各地区が連携し、地域間での相互交流や連動的な活動展開を進めたことにより、地域間連携によるまちづくりの具体的な実践例を蓄積することができた。さらに、これまでの取り組みにおいてモデル地区として機能してきた亀崎地区および有脇地区の事例を基盤に、乙川地区への活動展開を行うことで、他地域におけるまちづくりの新たな仕組みやスキームの適用可能性についても検証を行った。これにより、今後は亀崎・有脇両地区以外の地域においても、各地域の特性やニーズに応じた活動内容を企画・実施することで、広域的な波及

効果が期待される。